様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０６１３

研究課題名（和文）オンライン「国際協力的」と「国際共同的」語学学習方法の比較

研究課題名（英文）A comparison of cooperative and collaborative international online language learning methods

研究代表者
ＨＡＧＬＥＹ　ＥＲＩＣ（Hagley, Eric）

室蘭工業大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：６０４６６４７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：諸外国の大学などとオンラインコースをリンクさせて実践的言語利用の場を構築し、その利用を通じて学生の言語レベルや文化理解の向上に貢献した。「国際協力的」コミュニケーション及び「国際共同的」コミュニケーション活動の結果を分析して学生の語学学習や文化理解に対する両者の有効性を明らかにし、どちらの教育法がより効果的であるのかを明確にした。「国際協力的」コミュニケーション活動では、日本の英語学習者と米国・豪州の日本語学習者を対象とし、日本語と英語を使用した。「国際共同的」コミュニケーション活動では、南米のコロンビアや他のアジアの国の英語学習者と日本の英語学習者をその対象とし、使用言語は英語とした。

研究成果の概要（英文）：To create a place for students in numerous countries’ high schools, institutions of learning and universities to be linked thus being able to use the language they are studying in real world communicative events and through this, improve their language and cultural competence. Two methods of online language exchanges were used: cooperative and collaborative; and the benefits and utility of each method in relation to improving language learning and cultural understanding were uncovered. “Cooperative international online language exchanges” have students studying English in Japan linked with students studying Japanese in the U.S.A and Australia. “Collaborative international online language exchanges” have students studying English in Japan linked with students studying English in Colombia, Vietnam and or Taiwan.

研究分野：語学教育

キーワード：バーチャルエクスチェンジ　国際協力的オンライン語学学習　国際共同的オンライン語学学習　テレコラボレーション　英語教育

１．研究開始当初の背景

(1) バーチャルエクスチェンジ(VE)(従来はオンライン語学学習と呼ばれてきたが、研究中に米国及びヨーロッパの政府がそれに代えて「バーチャルエクスチェンジ」という名称を使用するようになったため、「二重言語バーチャルエクスチェンジ」(DLVE)と「単独言語バーチャルエクスチェンジ」(SLVE)との名称に変更した)とは、教員または専門家の指導の下、語学的に同じようなレベルにあって地理的に離れた学生同士が、オンライン技術に支えられた継続的教育交流プログラムを通じ、オンライン文化交流やインターアクション、コラボレーションを行うことである。それを実施することは、文部科学省が掲げている目標である「日本人学生のグローバル化を進める取り組みを中心に、大学の国際化を強化するグローバル人材育成推進」に合致することでもある。一般の英語コミュニケーション授業では基本的なコミュニケーション技術を教えるが、そこで知識は学べてもそれを実践的なコミュニケーションと呼ぶことはできない。実際に外国にいる学生などと交流しない限り、学生も本物のコミュニケーションとして認識することはない。この取り組みによって実際の交流によるコミュニケーション技術を定着させることも可能となるし、外国の学生との交流による他国文化理解の向上も期待される。VE を実施することで、このような実践的な交流が可能となるのである。

(2) 一口に VE と言っても、参加するパートナーとの調整や技術的問題をまず解決しなければすぐに実施することは困難である。今回の研究で本学の学生は二つの VE に参加した(研究最終年には合計７つの国内大学も参加)。DLVE と SLVE の両方に参加した学生は少数だったが、どちらかに参加した学生は、特に最終年には、かなりの数に上った。実際に参加しているかどうか確認できたのは Moodle という教育管理システムを導入していたためであるが、それによって学生の学習状況を把握することもできた。他国の学生とのコミュニケーションはフォーラムを利用して行うため、教員も他の学生も簡単にアクセスすることが可能である。このようなシステムが構築できたことにより、大勢の参加者を受け入れることができるようになった。「国際コミュニケーション」の実現にまた一歩近づいたと言える。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は三つあった。一つ目は、SLVEとDLVEにおける相互語学インターアクションによる言語習得可能性の問題を明らかにすることであった。総合的に判断すると、日本人学生の英語の講読、ライティング、リスニング、オーラルコミュニケーション学習にとって、どちらの方がより効果的と言えるのか。従来の研究はネイティブスピーカーと英語を第二言語として学習している者とのインターアクションに主眼を置くものであったが、本研究では英語を第二言語として学習している者同士のコミュニケーションにも重点を置いた。予め教員の指導によって正確な英語教育を受けられるようにすれば、英語を第二言語として学習している者同士であっても誤った英語を身につけるといった恐れはない。英語を第二言語として学習している者同士のインターアクションもネイティブスピーカーとのインターアクションに劣るものではないことを確認することもまた本研究の目的であった。本研究により、こうした言語教育が学生の高いモチベーションを引き出し、学生に言語を学ぶ上での自信を与えるものであることが明らかとなった。

(2) 二つ目は、異文化理解向上にとって VE が効果的であるかどうかの調査・検討であっ

た。VE に潜在する可能性は言語能力の向上にとどまらない。グローバルな知識や他国文化に関する交流課題を選ぶことによって、異文化理解の知識も深めることが可能であることが予想されたため、その現状についても調査した。

(3) 最後に Moodle というプラットフォームが VE に適切であるかどうかも検討した。

３．研究の方法

(1) 上述の目的を達成するため、参加した教員同士の協調を図り実践的な語学コミュニケーションを可能とするためのオンライン環境を整備し、パイロットコースの充実に努めた。語学学習や文化理解の達成度に関する調査も実施した。オンライン環境を整備し、Moodle という教育管理システムを導入することで、学生は一対一でもグループでも他国の学生とコミュニケーションを取ることが可能となった。テキストはもちろん、Poodll という Moodle プラグインにより自分の音声や動画も投稿することができた。

オンラインフォーラムの例

このようにオンライン環境を整備することによって、プロジェクトの推進や様々なテーマについての意見交換等の便宜を図った。こうした交流の中で、6 か国の学生は学習成果を実践的に活用することが可能となったのである。

学生はインターネットがあればどの端末からでも交流サイトにアクセスできたし、海外にいる学生とのインターアクションも可能であった。自分の投稿への返信や相手の投稿への返信などによって、数回同じ内容に関するやり取りが可能となったことで、語学学習の面でも効果が見られた。教員はシステムに簡単にアクセスできるため、各学生の投稿回数や使用した単語数、投稿日などに関し、管理も比較的容易であった。仮に不適切な文言や発言があった場合でも教員がすぐ対応できるシステムとなっているため、運営上の問題は生じなかった。言語習得・語学学習に関しては、他の英語教育方法と比較するために本学の学生が 1 年時と 3 年時に受験する TOEIC IP テストのスコア比較と学生のアンケートも実施した。

(2) 日本人学生（特に地方の大学に在籍している場合）は、通常の授業で外国人と交流するチャンスはほとんどない。そのチャンスがなければ異文化理解を深める可能性も低いままである。今回の研究により、時間も場所も制約を受けることなく VE に参加できた学生は、外国にいる学生と交流を持つことで異文化理解を深める可能性が広がったと言える。SLVE により、本学の学生はアジアや南米のコロンビアの学生との交流ができた。DLVE により、本学の学生は米国と豪州の学生とのアクティブな交流ができた。こうした交流を通して異文化理解はどのように深まったのか。アンケートの実施や感想文の提出によって我々はその成果を測定した。

(3) オンライン交流には様々な方法がある。フェイスブックや他の SNS、グーグルドックスなどにも長所はある。ただ、プライバシーや多重機能が必要な場合、しっかりした教育

管理システムを利用した方が安全・確実である。今回利用したムードルという教育管理システムは、世界中で利用されている安全で使いやすいプライベートなシステムである。それが学生や教員にとって適切であるかどうか確認するため、アンケートを実施して意識調査を行った。

４．研究成果

筆者が現在参考に出来る TOEIC IP のプリ・ポストテスト結果は二つある。2012 年プリ 2014 年ポストと 2013 年プリ 2015 年ポストである。統計として出る学生数(n)はプリにもポストにも参加した学生でなければならない。言うまでもなく実際に授業に参加した学生数は統計数より多い。電気電子工学コースの学生は、二つのクラスに分けて一つは DLVE を導入した授業、もう一つは VE のないした。情報コースの学生の TOEIC スコアを見ると、DLVE に参加した学生(n=12)は平均 90.00 アップしている。一方参加しなかった学生(n=11)の場合は、87.27 点のアップだった。

その翌年、本学の土木コースの学生も二つのクラスに分けた。一方は DLVE を導入した授業とし、もう一方は VE がない授業とした。土木コースの学生の 2015 年ポスト TOEIC テスト結果を見ると、DLVE に参加した学生(n=22)は平均 83.26 アップしている。一方参加しなかった学生(n=15) の場合は、68.67 点のアップだった。さらに、情報システム学コースの学生も二つのクラスに分け、一つは DLVE を導入した授業、もう一つは SLVE を導入した授業とした。学生の TOEIC スコアを見ると、DLVE に参加した学生(n=17)は平均 65.00 アップしている。一方 SLVE に参加した学生(n=16) の場合は、87.19 点のアップだった。

単純に比較すると、VE を導入した授業の方が導入していない授業より語学学習にとって効果的であると言えるが、参加人数やその他の影響（２年の間に他の教員の授業にも参加している）、VE 期間（8 週間)を考えると、それがまだ確実な結果であると断言することはできない。TOEIC IP 自体も適切な測定方法ではない可能性もある。SVLE も DLVE も効果的と言えるが、今回の研究結果を見ると、SLVE の方が DLVE より僅かだが良好な結果を示している。とりあえずの結果として、効果的であることは確認された。さらに、学生の英語教育に資する結果も見られた。いずれの VE 方法においても数多くの意味交渉やコミュニケーション修復、共同学習の現象が見られ、学生の言語学習におけるアウトプット量とインプット量の増加が確認された。平均すると DLVE のコースでは 20 人の日本人学生が合計 5826 回フォーラムを訪れ、合計 207 回フォーラムに投稿している。SLVE のコースでは 36 人の日本人学生が合計 7963 回フォーラムを訪れ、合計 493 回フォーラムに投稿している。このような交流は語学習得にとって効果的であるのは間違いないことである。下記のアンケート結果を見ると、学生も VE が語学習得に効果的と考えていることは明らかである。

(2)　異文化理解を深めるためにはまず他国の文化を紹介しなければならない。実際に交流することが最良の方法であるが、それが物理的に不可能な場合、オンライン方法が良い代替方法となる。今回の研究のおかげで学生は一対一で外国人と交流できすることができた。そして相手の文化や日常生活などの情報をダイレクトに知ることもできた。自由に質問をすることにより、意味交渉や多文化理解も可能となった。学生の意見を分析すると(下記の最終 VE コースからとったアンケート結果)、日本人学生だけではなく他国の学生の場合も異文化理解の深まったことがわかる。相手国に関心を持つようになり、その国

についての理解も深まり、情報の交換を望む姿勢が見られる。この結果から、他文化理解がどこまで進んだかその詳細を明らかにすることはできないが、筆者としては第一歩として成功であると考えている。

	コロンビア学生 (n=106) 強く賛成/賛成	日本人学生 (n=254) 強く賛成/賛成
英語学習にこのようなオンライン交流は役に立つ。	91%	85%
参加した他国について勉強になった。	79%	73%
今回のオンライン交流のサイトは使いやすかった。	86%	56%
オンライン交流のおかげでもっと英語を勉強したくなった。	84%	60%
他国の学生との情報交換はしたくなかった。	85%	81%
今回のオンライン交流のおかげで相手国により関心を持つようになった。	87%	66%

(3)　上記のアンケート結果を見ると、プラットフォームとしてのムードル利用は成功であると言える。コンピューターからのアクセスはもちろん、最近はスマホなどの端末でもさらに使いやすさが向上し、システムの堅牢さも増している。スマホでの使い勝手も、当初と比べると格段に向上している。

本プログラムの有効性は国際学会などでの発表後広く認められようになり、これまでに国内外を含め 8 か国 20 校以上の教育機関で本学が開発した VE プラットフォームが利用されるようになっている。今もその数は増え続けている。その中心は日本とコロンビアであるが、現在では中国や台湾、UAE などでも利用する学校が増加している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Hagley, Eric. Single and Dual Language Virtual Exchange for Language Learning 第 65 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会　研究収録, 2015/02

② Hagley, Eric. Moodle as a Conduit for International Telecollaboration, Proceedings of the 2014 Moodle Moot, 第 1 号, 13-16, 2014/05

③ Hagley, Eric. Collaborative and Cooperative Online Language Exchanges, Journal of Language and Culture of Hokkaido, 第 12 号, 43-50, 2014/03 （審査有り）

〔学会発表〕（計 7 件）

① Hagley, Eric. Global Learning via Large Scale Virtual Exchange, TESOL Arabia, TESOL Arabia, 2016/03, ドバイ, アラブ首長国連邦

② Hagley, Eric. Single Vs Dual Language Virtual Exchange, FLEAT VI(於ハーバード大学, The International Association for Language Learning Technology (IALLT) and the Japan Association for Language Education & Technology (J-LET), 2015/08, ボストン, 米国

③ Hagley, Eric, Shoji, Kyoko Dual Lingual Tele-Collaboration - Borderless Language Exchange, 全米外国語教育学会年次学会, ACTFL, 2014/11, サンアントニオ, 米国

④ Hagley, Eric. Autonomous Learners' Communication in Practice: Single and Dual Language Virtual Exchange, Korean

Association of Multimedia Assisted Language Learning, KAMALL, 2014/09, ソウル, 韓国 (招待講演)

⑤ Hagley, Eric. Ohashi, Hiroko.日英二重言語のオンライン語学学習交流によるコミュニティ構成, 2014年日本語教育国際研究大会, 豪州日本研究学会, 2014/07, シドニー, オーストラリア

⑥ Hagley, Eric. Cooperative or Collaborative Online Language Exchange - they are very different, The 1st International Telecollaboration in University Foreign Language Education, 欧州連合, 2014/02, レオン, スペイン

⑦ Hagley, Eric. Online Language and Cultural Exchanges: Collaborate or Cooperate?, The 7th Globalization and Localization in Computer-Assisted Language Learning (GLoCALL), APACALL & PACCALL, 2013/11, ダナン, ベトナム

6. 研究組織

(1)研究代表者

HAGLEY Eric
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号:６０４６６４７２